ナンセンスな意志のスタイル

未視感（誰も見たこともなければ、考えたこともないこと）を目的にする事についての約束事。　予めの良し悪しについて予見できてしまうことには挑戦しない。　つまり、自分の力で確かめなければ判らないことについてのみ挑戦すること。

作品に対して、身体は反応の仕方を知っていてはならない。それは、やがて訪れる。いや、与えられる出来事でなければならない。他方、作品は経験から、逃げ出す出来度でなければならない。芸術家としての立場、権威、説得力さえも、脅かされるのでなければならない。後退するのでなければいけない。つまり、自作についての不安を完全に消し去ってはいけない。それは、さながら自らが消え去ることに徹底して努めることによって示されるのでなければいけない。さらに、その不安は上昇するのでも下降するのでもなく、協同することができる可能性を秘めるのでなければならない。くれぐれも、これは禁欲的な行いではなく、表現者にとっての大義の一つである。なぜなら、そうしてやっと自由（独立自存の容態）になれるのだから。

未視感は、私（見る人）と対象との関わり方、その埒外、<意識の外側>に位置していることに疑いはないはずだ。であるならば、私が選ぼうとする目的、あるいは現象から、必ず失敗をするのでなければならない。失敗との出会いによって、そこには、ちょっとした切れ目のようなものが立ち上がる。それは判らなさを見通すことができる契機に違いない。その調子を絶えず引っ張りながら、見ようとするコトについて、およそ隠されたかのような第一義的性質（潜勢力・例えば、土に埋まって依然、見ること、知ることの叶わない種子の可能性、偶然性）を触らないで、そのままの状態で、ゆっくりと確かめながら暴いていく。見えるようにしていく。表象（私にとって～であること）が失われているのであれば、僕は自分の存在についての説得力を台無しにしつつも、世界の側の潔白を証明することができるだろう。何度でも、何度でも、何度でも―　世界への解釈は一向に解けることを知らないはずだ。

他者とは何か？　アートとは何か？　例えば、そういった具合の問いを常に新鮮な状態（宙吊りの状態）に保つこと。それが現在における僕の沈黙の思想です。

Not yet relation

存在をアポステリオリ（後天的）な出来事として認める覚悟があるのであれば、漠然さながらの沈黙は先立ち。それに向き合うことが許される出来事なのであれば、初めて関係はつくられるのでなければならないだろう。

2015　坂井田　武志